鉄の歴史
鉄の人物史-5

渡邊義介
—ビジョンを追い続けた日本鉄鋼業近代化の父—

金井　武　(株)日活アド・エイジェンシー 編集主幹
Takeshi Kanai

Gisuke Watanabe
—The Visionary Father of Japan's Iron and Steel Industry's Modernization—

1 はじめに

北九州市内を西進するJR鹿児島本線の沿線には、戸畑から枝光、八幡にかけて新日鐵と関連企業の広大な設備群が展開する。その中に1901年(明治34)に操業開始した官営製鉄所東田第1高炉を記念する製鉄公園、そして、1990年(平成2)春、オープンしたテーマパーク「スペースワールド」が立地して、時代の変化を強烈に印象づける。

新日鐵社内では、八幡製鐵所を“母なる製鉄所”と呼んできた。日本鉄鋼業発展の礎を築き、製鉄技術向上の文字通り中核体として貢献してきた実績への評価である。

渡邊義介は大正初めから、1956年(昭和31)八幡製鐵2代目社長在位のまま没するまで40有余年間、鉄を舞台に心血を注ぎ、鉄と共に生き抜いた人物である。とりわけ、原料問題に精通して戦後の再建、近代化を方向づけた透徹したビジョンは、その後逐次、的確に実現していった。まさに、“日本鉄鋼業の父”と呼ばれるにふさわしい功績である[1,2]。

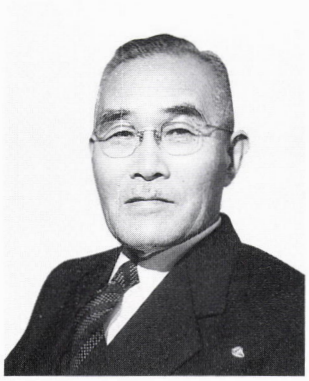

図1　渡邊義介

2 波乱に富む終戦までの半生

2.1 八幡で鉄との出会い

渡邊義介は1888年(明治21)4月、新潟県の弥彦山の山麓の村に生まれた。父・忠は日本石油(株)の創立者の一人である。4歳年上の兄・譲吉も終戦後、日石社長を勤めている。

柏崎中学、金沢四高を経て1909年(明治42)9月、東京帝国大学法科大学経済学科に2期生として入学、1913年(大正2)7月卒業して農商務省に入り、山林局に配属された。1916年(大正5)八幡製鐵所の拡張に伴い、原料事情に詳しい渡邊が製鉄所に派遣され、用度科長事務取扱として、第一次大戦による鉄不足の中、原料確保に奔走する。鉄との出会いである。

翌1917年(大正6)、資源調査のため、押川則吉長官に随行して支那へ初の海外出張、帰途朝鮮の山も見学して、視野を広めた。その後、組織改正で経理部倉庫課長になるが、仕事の内容は変わらない。

この頃、東京・大森に隠居中の父の健康がすぐれず、本省のかつての上司・中井励作特許局長らに帰京を希望、1919年(大正8)末、ほんの腰掛けで農商務省外局の特許局審理官兼事務官になった。最初の八幡での3年余りは、製鉄現場のダイナミックな光景やデリケートな圧延作業に目を見張り、なかでも鉄鉱石、石炭、石灰石、さらに配船の苦労や海外の鉱山を学ぶ充実した時期であった。

2.2 鉱政課長で本舞台に立つ

特許局の仕事はまことに地味ながら4年間、庶務、出願、登録各課長を着実に務めあげて、以後、得意分野の鉱山局製鉄課長、製鉄課の廃止に伴い水産局水産課長に移り、1925年(大正14)の農商務省分離で商工省鉱山局鉱政課長に就いた。鉱政課は製鉄課を吸収した組織で、渡邊はここで鉄の本舞台に立つことになる。

大正末期から昭和初期にかけての我が国産業界は、世を挙げて企業の合理化、カルテルに走った。政府は臨時産業

合理局を設置して、ドイツの産業政策、産業合理化の後を追い、渡邊も1927年(昭和２)、半年間欧米出張して知見を深めたが、「あの頃はドイツのマネばかりしていた」と述懐している。

1929年(昭和４)、世界大恐慌が起こり、金解禁断行、産業各界の人員整理、賃下げ、さらにカルテル、減産、休業というあわただしい世相の中で、貿易局が新設されて立石信郎製鉄所販売部長が局長に就任、後任に渡邊が回ることになった。製鉄所は鉱政課の所管なので、いわば身内であり、製鉄所長官は中井励作先輩だったから、水を得た魚のような感慨だったであろう。

2.3　日鐵発足、八幡所長就任

1930年(昭和５)５月、渡邊は製鉄所理事、東京出張所長兼販売部長として製鉄所入りし、10月には総務部長として11年ぶりに八幡へ戻った。

その頃の鉄の販売事情は、四指定問屋制度の確立で鋼材払い下げ長期契約が結ばれ、鉄鋼販売史から見れば画期的な体制が整いつつあった。ただ、鉄の景気は1929年(昭和４)をピークに下降線をたどり、着任した翌月には鋼材連合会が操短を３割から５割に強化、高炉を４基休止するなど、深刻な不況に蔽われた。

そんな業況の中で、商売にはズブの素人の渡邊の役目は、売掛代金の集金と八幡への送金だが、遅々としてはかどらず頭を抱える日々が続いた。「一生で最も苦心したときだったが、中井長官から“景気不景気はしょっちゅうあることだ。不景気だからといって鉄の需要が絶えることはない、また来る春がある、びくびくするな”と教えられた」[1)]。

製鉄所の大量の人員整理にも総務部長として矢面に立ち、心労がたたって肺えその大病を病んだ。しかし渡邊の「人は宝だ、一杯の飯を半分に減らしても、整理はできるだけ少なくしよう」とする労使を超えた親心が信望を集め、何とか乗り切れたと周囲の関係者は記述している。

1932年(昭和７)に入ると、五・一五事件、次いで上海事変が起こり、景気は回復に向かい、長期減産もようやく緩和へ転じる。同時に、斎藤実内閣の出現で製鉄合同論者が経済閣僚に名を連らね、鉄鋼界最大の懸案だった日本製鐵株式会社法案が1933年(昭和８)３月成立、1934年(昭和９)２月発足した。日鐵には製鉄所と釜石、輪西など１所５社、２年遅れて大阪製鉄が加わったが、鋼管、小倉、鶴見、神鋼、川鉄、吾嬬は合同しなかった。

日鐵開業に伴って、渡邊は官吏としての製鉄所総務部長から、半官半民ながら営利企業の日鐵取締役八幡製鐵所長となった。時に45歳。初代社長は中井励作で、中井、渡邊コンビも継続された。

日鐵は各製鉄現場、旧商工省系、各財閥系の寄合世帯だけに、最大の現場である八幡所長として、旧民間系製鉄所の事情をよく理解して、日鐵全体の融和に心を砕いた。特に最も低コストの釜石について、その拡張に尽力したといわれる。八幡においても部下の進言を容れて、民営にふさわしい能率的な組織づくりに努め、企画監査部門と実施部門との分離、つまりライン・アンド・スタッフ・システムを採用している。我が国の工場では初の試みだった。官営時代には皆無だった所長巡視と現場会議も週１回、１年間続けている。

2.4　役人の視野の広さに自負

1937年(昭和12)２月、八幡の洞岡第三高炉が火入れされた。我が国製鉄史上初の千トン溶鉱炉の出現である。高炉だけでなく、原料処理、巻き上げ、熱風、除塵、送風などの付属施設もすべて八幡の手製である。自信を得た日鐵は翌年同規模の第四高炉を完成、既存の第一、第二高炉も千トン炉に拡大して、八幡は12基、全国生産の約７割に当たる6,000トン体制を確立した。人々が渡邊の風貌を評して「千トン炉が座っている感じ」と語りだしたのも、この頃である。

1937年(昭和12)日支事変が勃発。鉄鋼業は製鉄事業法、軍需工場動員法などが公布される中で、準戦時態勢に入り、日鐵は純民間人の大物、文相経験者の平生釟三郎を会長に迎える。平生の第一着手は鉄鋼資源の確保にあり、渡邊は南京郊外の馬鞍山、ついで大冶鉄山の視察に出向いている。政府の強制的な要望で、八幡に産業報国会が設立されたのが1939年(昭和14)４月。所内では設立案をめぐって議論百出したが、十分に意見を聞いた上で、渡邊所長は掛長以上を集め、「これはファッショ、全体主義に通ずるもので、一歩を踏み出すのに重大な決心が必要である」[2)]と、沈痛な面持ちで講話している。全国の産報の会長は他ならぬ日鐵の平生会長が就く。出席者の一人は、軍国色強まる中で国の将来を思う苦悩、古武士を思わせる憂国の士を感じたという。

この平生会長と渡邊はやがてたもとを分かつ。国策会社で重役の大半を軍部、各省の天下り、財閥系で占める日鐵の改革を意図していた平生は1940年(昭和15)暮れ、二重ボード制を廃止、自から社長に就任して重役総辞職を切札に古参重役、特に官庁出身者の退陣を強行した。官僚批判に対して渡邊は、役人は全体的見地で物を考える訓練をされている、政策を立て、監督していく立場の役人は公平である、という人生観に徹しているから、平生とはソリが合わない。渡邊は、６年間の製鉄所長を辞職、本社常勤常務として八幡を去った。

本社では在籍のまま、日本鋼材販売や日満鉄鋼の社長、

関連団体役員を兼務するが、平生社長の強引な人事に腹をすえかねて1941年(昭和16)12月、太平洋戦争突入直後に黙って辞表を提出、日鐵を去る。同時に平生社長も退任して、豊田貞次郎大将が社長、小島新一前商工次官が常務に就任した。

2.5 浪人から日鐵社長まで

浪人生活はしかし長続きしなかった。東条内閣は華北に八幡に匹敵するほどの大製鉄所の建設を計画、基礎調査のため日本製鐵株式会社北支調査団を結成して、その団長に推されたからである。

調査対象は塘沽、天津、石景山などの4地区で、当面銑鉄80万～100万トン、将来200万トンの一貫設備に移行する構想。調査は1942年(昭和17)5月から5カ月にわたって、鉄鉱山3地区、炭鉱5地区と積出港となる秦皇島を踏査した。酷熱と北京郊外には盗賊団の襲来もある悪条件下で、軍部、行政関係機関等との連絡、認可がことごとく必要な煩雑な作業をこなすのは容易ではない。渡邊は窮屈な予算にも音をあげる団員を慰め、励ましつつ報告書をまとめ上げた。

この渡邊プランは、戦局の悪化、輸送力低下、資材・機器不足の前に「第二期計画」に棚上げされ、既存の石景山製鉄所に釜石の350トン高炉など、内地の遊休設備を移設、急場しのぎの増産を図ることになる。1942年(昭和17)12月、北支那製鉄が設立され、初代社長に渡邊が推された。八幡とは比較にもならない小規模な設備だが、責任上、快諾したという。

ところが1943年(昭和18)正月早々、渡邊は空席になった鉄鋼統制会理事長に引っ張り出される。極度にひっ迫する鉄の生産、配給をコントロールする理事長は容易ならぬ大役であり、その衝に当たり得るのは彼をおいていないという業界首脳の総意で、再三辞退する渡邊を説得するため藤井丙午が使者に発ち、3日間必死に口説き落とした。

1945年(昭和20)4月、鈴木内閣の発足で日鐵の豊田社長が軍需兼運輸大臣として入閣、渡邊義介は当然の人事として日鐵社長、鉄鋼統制会会長に推挙された。

しかし戦局は極度に悪化、広島原爆投下の2日後、8月8日に八幡市は徹底的な空爆を受け、製鉄所は全面的に操業を停止、9日には釜石も艦砲射撃に見舞われ、15日終戦を迎える。

3 戦後鉄鋼業の使命感掲げて

3.1 日本再興に不動の信念

戦争で外地の全資産を失い、内地5工場のうち、八幡、釜石、室蘭は壊滅的打撃を受け、日鐵で残った設備は広畑と川崎のみ。それも原料途絶、社会不安の増幅などでお先真っ暗である。

悲惨な空気に包まれて、10月末、日鐵再建を審議する歴史的な役員会が渋谷・松涛の事務所で開かれた。会議は議論に沸騰したが、当面第二会社をつくり、動ける設備を日鐵から賃借りして再開することに決した。「日本は今後、スイスのような精密加工業で」という発言も出たが、終始黙々と聞いていた渡邊は「そんな考えはいけない。鉄をないがしろにして国は立たぬ」と、毅然と言い放った。

労働組合幹部との会談でもこう述べている。「全従業員が身命を投げ打って粉骨砕心したにもかかわらず、敗戦の悲運に際会したことは、真に残念である。しかし我々は祖先のため、子孫のためにも、もう一度立ち上がって、立派な日本を再興すべき義務がある。鉄鋼産業は平時においても国家の基幹産業として、国家の興隆に重大なる使命をもつものであり、労使が協調してこれが発展に努めなければならない。健全な労働組合の発達を心より希求すると共に、協力を切望するものである」[2)]。

大量の人員整理、労働組合対策、満州製鉄引揚者の就職、残留者留守家族へのきめ細かい心配りなど、超多忙の一方、渡邊は一貫、平炉、単圧の製鉄所群、売手、買手の立場が包含された業界をまとめ、藤井丙午に「日本鉄鋼業再建の基本的方策」を書かせて、戦後初の民間による自治統制団体「日本鉄鋼協議会」を設立、自らその会長となった。

また、GHQに対しては日鉄解体の意向に断固反対して、持論を堂々と展開した。鉄鋼業の性格は一変し、世界景気が直接響く時代であるから、設備近代化、長期的原料対策、輸出産業としての基盤強化に専念しなければ、到底自立はあり得ない。巨大企業の指導者も、社会性を十分認識し、綿密な計画、周到な注意であらゆる知識と経験を動員して計画運営しなければならない、としきりに説いていた。

1946年(昭和21)2月、追放令が公布され、渡邊、小島など古参の首脳陣はことごとくパージにかかった。政財界、言論界の多くは弁解これ努めて追放逃れを図ったが、渡邊は戦争責任を負って、正式命令に先立って社長、統制会会長の座を去り、粛然として野に下った。後任社長には三鬼隆・八幡所長が就任した。

3.2 “孫”の懇請に屈して再登場

一切の公職から身を引いた後は、もっぱら荻窪の自宅で畑仕事。下肥を汲んで担ぐ姿は素人放れしていたという。追放後は、三鬼社長に頼まれて、香港の商社がズングン鉱石を日本へ輸出するための受け皿商社の監査役を勤めたりしたが、殆んどは悠々自適の日々だった。

やがて、1949年(昭和24)末に日鐵広畑の再開が許可され、1950年(昭和25) 4月日鐵は解体し、八幡製鐵、富士製鐵、日鐵汽船、播磨耐火煉瓦の4社が分離独立した。日鐵汽船の独立や日本ピッチコークスの苦況打開(八幡化学の前身)に、渡邊は三鬼社長と共に親身になって助言、指導したのもこの頃である。戸畑化成の創立や日本特殊鋼管の支援にも貢献しており、渡邊は鉄鋼マンが最も頼れるオヤジであった。

1950年(昭和25) 6月朝鮮戦争の勃発で鉄需が高まり、価格も値上がりして、戦後の傾斜重点方式による鋼材補給金が撤廃された。価格統制も廃止されて、自由主義経済体制が本格的に動き出した。八幡製鐵は1951年度(昭和26)を初年度とする第一次設備合理化計画を決定、休止中の設備復旧と導入技術を中心とした技術革新を伴う設備の新設・改造方針を打ち出した。他社も相次いで設備合理化計画に着手した。

1951年(昭和26)に追放を解除される。三鬼は早速、八幡製鐵相談役就任を手を尽くして申し出たが、八幡が今日あるのはすべて現役諸君の功績だ、と固辞した。

1952年(昭和27) 4月上旬、渡邊と小島は八幡・富士両社の社員数人を連れて三重、和歌山地方へ旅に出た。そして4月9日、熊野三社詣でから白浜温泉の宿に着いた時、「もくせい号」墜落事故で三鬼社長の訃報を知る。航空将校だった次男庸介が飛行機事故で亡くなったのも、9年前の同じ日だった。

そこで後任問題である。大方の意見は渡邊義介をおいて他にあるまい、であった。しかし性格を熟知する重役たちは、容易な手段ではかなうまいと承知していた。一同揃って自宅を訪れると案の定、「世の中はすっかり変わった。いまさら、わしの出る幕じゃない。君たちで十分やれる」の一点張り。決め手は戦時中の口説き経験者の藤井丙午に委ねられる。日参した彼の殺し文句は「私たちは父親を失った子供同然です。おじいさんがピンピンしておられれば、子供が一人前になるまで孫の面倒を見るのは当然の義務でしょう。ここは理屈抜きに出て下さい」[1]。“孫”の一言に、「逆縁ながら」と再出馬を決意した。

3.3 近代化へ二大方針

1952年(昭和27) 5月、渡邊義介は八幡製鐵二代目社長に就任、日本鉄鋼連盟会長、経団連常任理事(11月副会長)ほか数々の要職に就いた。副社長に小島新一を据え、渡邊・小島コンビも復活する。形影相伴う二人をある財界人は“ハム・アンド・エッグス”とアダ名した。

渡邊社長は就任早々、二つの大方針を打ち出した。一つは八幡の“風通し”をよくすることである。八幡地区の工場群は継ぎ足しで建設されてきた。古い設備は撤去、移設して、能率のよい工場にしたい。その主な対象になったのは当初計画で八幡に設置を予定していた新線材設備中心の光製鉄所建設と、第一次設備合理化計画に追加する厚板工場の統合である。

渡邊は八幡製鐵所長時代の1939年(昭和14)頃、技師長の下に技術会議を設け、戸畑に高炉、平炉を中心とする一貫作業の設備を造る構想を描いて、立案、討議を重ねさせ、熱心に会議に出て耳を傾けたいきさつがある。“風通し”の発想はその実現化の一環でもある。

もう一つは、八幡が造る工場、新しい会社は、日本鉄鋼業のレベルを引き上げるものでなければならない、とする強固で高邁な決意の表明である。

光計画は、旧海軍工廠跡地に立地していた徳山鉄板の了解を得て、建設基本方針を決定、西独に発注していた線材設備を光に移すため光建設局を設置した。自由主義諸国では最初に稼働する新鋭高性能設備であり、新製鉄所にふさわしいものである。光製鐵所は1955年(昭和30) 5月に発足、創業以来の1社1製鉄所から複数製鉄所へ移行する端緒となった。

3.4 原料確保に的確な布石

昭和20年代後半の鉄鋼界には、450万トンもつくればダブつくのではないかという見方が多かった。だが渡邊は違った。日本鉄鋼業は内需をまかなうだけでなく、東南アジア諸国に供給する義務がある。それには欧米との競争に勝たねばならぬが、良い鉄を安くつくる自信は十分ある。問題は原材料の輸入拡大にあった。ここは前記したように、彼のホームグラウンドである。

原料問題は絶対量の確保と同時に、コストが懸案だった。1950年(昭和25)頃の八幡で、総原価に占める原料費比率は60%を超えている。鉄鋼コスト低下には原料費切り下げが不可欠の条件だった。

しかし国内炭は高価格のまま。最大の供給国で、八幡に最も近い中国の原料供給基地も朝鮮事変で貿易が途絶する重大問題に直面した。原料炭は米国炭の輸入増でカバーできるが、鉄鉱石は急場を米大陸から充当したものの安定供給源とはなり得ず、近距離にある東南アジア資源の開発が急務であった。

「東南アジアだけで間に合うか、中南米まで行かねばならぬか、とにかく10年先、20年先まで考えて方針を立てる必要がある。鉄鋼業の公共性から、全産業の基礎となる鉄鋼価格の安定を図るには、まず鉱石価格の安定が先決問題である。そのためにはせめて輸入の半分は安心できるベース・オアーをもたなければならない。ひとつ商社の手を借

りず、八幡、富士、鋼管の3社で鉱石の直接買い付けを研究しようじゃないか」[2]。

当時、高碕達之助が政治力を駆使して、インド銑鉄の生産に取り組み、現地に製鉄所建設を働きかけていたが、渡邊は業界の一致協力を求めて、海外製鉄原料委員会を設置して委員長になり、インドのゴア鉄鉱山開発を皮切りに、フィリピンのララップ鉄鉱山、マレーのテマンガン鉄鉱山などの開発を手がけ、さらに長期購入契約を結んで安定供給態勢を推進した。

八幡製鐵は一方で、独自に資源確保対策として、ラテライト鉱石の利用研究を進めている。豪州鉱石の導入で日の目を見なかったが、高品位鉄鉱石の埋蔵量の限界を見込み、渡邊社長の意を体して、長期的視野から原料問題を解決しようとする意欲の現れであった。

3.5 専用船、カルテルに尽力

鉱石専用船も重要な課題だった。需要増大につれて、供給基地も次第に遠隔地化していく。このため、鉱石専用船の建造、運航が必要になる。

もちろん、渡邊委員長も同意見だが、こう説くことも忘れなかった。「折角の専用船も、積地、揚地の港湾や荷役設備が劣っていては十分に威力を発揮できない。至急、それらを調査し改善するのが、専用船実現の前提としての製鉄業者の仕事である。これが実現してこそ、数量と価格の安定を期待し得る」[2]。

当時の特筆したいもう一つの問題にカルテル化がある。渡邊は終戦直後、占領軍の独禁法制定に大反対した。講和条約締結後も独禁法が存続する状況に、改正ではなく、撤廃を強く主張している。独禁法は米国の破壊政策だと喝破するのである。

このため、スクラップ・カルテルを結成し、運営に懸命な努力を払った。カルテル崩壊の危機に直面した時は、他社の背信行為に怒り心頭に発しながらも、無秩序な自由競争に走らず、業界の大混乱を未然に防いでいる。稲山嘉寛以前に、渡邊は“ミスター・カルテル”の先駆者だったといえよう。

3.6 安くて良い鉄をつくる

渡邊社長は 1956年(昭和31)の年頭所感で、戸畑銑鋼一貫体制確立を柱とする第二次設備合理化に取り組む計画を明らかにした。

「八幡が当初計画した、圧延部門の老朽化設備を近代化する合理化計画は大半が終了した。鉄鋼業が日本経済の自立達成に果たす役割は極めて大きく、当社の今後の合理化ないし設備拡充は、積極的に経済自立五カ年計画に順応するものでなければならない。従来の八幡は洞海湾を囲む工場立地を基礎としてきたが、拡大する生産規模に応ずるための八幡の合理化の方向は、戸畑を中心とする港湾荷役設備から、製銑、製鋼、圧延さらに運輸、動力部門等を含む一貫した総合的な合理化政策が必要である」[3]。

この戸畑への鉄源集約を始めとする第二次計画が、後年着実に実現されたことは周知の通りである。

しかし、この年頭所感を読み上げることはなかった。1956年(昭和31) 1月、正月三が日を熱海の寮で過ごして帰宅した渡邊は、6日夕方、狭心症をおこして容態急変、絶命した。67歳9カ月、まさに巨樹倒るであった。

1956年(昭和31) 1月の雑誌「エコノミスト」に、わが国鉄鋼界、経済界に贈った次のような絶筆「私はこうしたい」が掲載されている。

「どうしたら安くて良い鉄をつくれるか。これがわれわれ鉄鋼業に携わる者の一番の関心事であり、また最大の使命であると考えている。そのため各企業とも、設備の近代化、新技術の練磨には、異常なる熱意を示しており、戦後この面からする能率の改善は、極めて顕著なものがあったと信ずる。また、原料価格の安定ないし引き下げが、鉄価安定の基礎条件たるに鑑み、昨年われわれは手始めとして、価格変動の最も激しい屑鉄について、いわゆる屑鉄カルテルを結成したが、この方は遺憾ながら十分なる成果を収めることが出来なかった。今年は是非この原料面の対策を徹底的に究明して、国民需要家のご要望に応えると共に、ますます輸出の伸展を図ってゆきたいと願っている。そのためには業界内部の自主的な結束が必要なので、取り敢えずこの業界の結束態勢確立ということを、私の畢生の事業にしたいと念じている」[1]。

鉄に生涯を捧げ、日本鉄鋼業の将来像を透徹した信念で描き続けてきた渡邊義介の面目躍如とした絶筆である。

4 “親和協同”をモットーに

4.1 科学技術に深い関心

渡邊義介は、経済学科を出て高文パスした行政官であり、事務屋である。とはいえ、技術に深い関心を示した。キルド鋼の疵対策が問題になった時、「こんなふうにしたらどうじゃろか」とか、「品質の良い鉱石ばかり使うのなら、購買部長だけでいいじゃないか」などとからかったりした。コークス炉の改良工夫に英断を下し、欧米に比肩する進歩をもたらしたりしたこともある。鉱山局鉱政課長時代に、硫化鉄の焼鉱を資源にしようと、調査予算の確保に骨折ったいきさつも、後年原料問題に精通する布石になったといえよう。八幡製鐵所時代、石炭通の用度課書記から数時間にわ

たるレクチャーを受けたという話も残っている。戦後は原子力と鉄鋼の関係について大変興味を持っていたらしい。

製鉄現場では、厚板のスケール除去に使う竹を山へ一緒に刈りに行ったり、竹に代る萩を所内に植えるなど、労働者と共に汗を流すことを忘れなかった。1935年(昭和10)頃、大原労働科学研究所所長の暉峻義等医博一行10数人を招いて、熱間労働作業の生理的影響について研究を依頼している。当時としては実に進歩的な思想であり、職工懇談会の開催なども併せて、上意下達、下意上達にはことのほか気を配ったといわれる。色紙によく、“親和協同”としたためた。

しかし、権力にはむげに屈しない。1939年(昭和14)、日の出の勢いだった初代航空総監・東条英機が製鉄所へ視察にきた。憲兵隊からの電話で、所長以下各幹部が玄関でお迎えするよう申し入れがあった。皇族または所管大臣以外にそうした例はない。「いや、私はここでお待ち申し上げよう」と所長室を動かなかった。前後の思慮分別に深く、常識や礼儀を重んずる人だった。

容貌は人呼んで「北向きの鬼瓦」。初対面でたじろぐ向きが多かったが、情誼に厚く、人柄に裏がなく、イエス、ノーが明快で、約束は一諾千金だから、“高僧の風格”“古武士”の評も聞かれた。

4.2 スロー・バット・ステッディ

遊び好きだったことも有名。

スポーツでは、少年時代はスキー、野球、製鉄所入りしてテニス、ビリヤードを覚え、ことにゴルフは渡邊杯を出すほどの力の入れよう。村相撲の三役格の体軀ながら、しかしどのスポーツもさほどの腕ではなかったとか。

囲碁、麻雀もやったが、製鉄所ではトランプのオークション・ブリッジがお気に入りで、終業後、誰彼をつかまえては興じたという。

酒はかなりいける口で、宴席ではよく柏崎の三階節、佐渡おけさなどの民謡を披露した。極めつきは“号外売り”。第一次大戦の対独宣戦布告で1914年(大正3)年秋、日本軍が青島を占領した時、開業したばかりの東京駅あたりで法被に鉢巻姿の号外売りが「チンタオカンラク　チンタオカンラク」と叫んでは飛び跳ねた。それを誰かが舞踊に振り付けたのを見たのが農商務省入りした翌年、恭子夫人と新婚ホヤホヤの渡邊。見よう見真似で独自の余興“号外売り”を編み出し、晩年まで興至ると披露して、拍手喝采を浴びたが、後継ぎは出なかった。

万事に、どちらかといえば、スロー・バット・ステッディで、一貫した正攻法に徹し、鉄をこよなく愛し、直言してくれる人を尊んだ一生であった。

八幡製鐵は没後、鉄鋼技術の研究に深い関心を払った生前を考慮して、1,000万円を日本鉄鋼協会に寄贈。協会は八幡製鐵渡邊記念資金を設けて、資金の利子を、わが国鉄鋼業の進歩発展に貢献した者に、渡邊義介賞および渡邊義介記念賞を贈るなど、事業の費用に充てている。

注）鉄の人物史シリーズの題目は敬称を略させて頂きます。

参考文献

1）渡邊義介回想録，八幡製鐵(株)，(1957)
2）鉄鋼巨人伝・渡邊義介：鉄鋼新聞社編，工業図書出版(株)，(1966)
3）炎とともに 八幡製鐵株式會社史，新日本製鐵(株)，(1981)

(2000年4月10日受付)